

各パートの音が決まったら一度録音してみましょう。そして録った音をミキシングルームで確認してみましょう。この音が最終的な音になる訳ではありませんが、あまりかけ離れた音ではミックスダウン時にイメージした音にならなくなるので、ある程度はこの時点で作り込んでおきましょう。

また、演奏する時のヘッドフォンモニターも必要に応じてリクエストして下さい。

(何のパートを大きくとか、リバーブを少なめとか、なるべく具体的に言って下さい。)
特に、クリックを聞きながらの演奏にはモニターは大切です、ここでクリックとずれた演奏を録音すると後々影響が出てきます。ただし、ドラムには多くのマイクが立っていますのでヘッドフォンから音もれがあると (特にクリック) マイクから回りこむことがあります。テンポの遅い曲や静かな曲、ブレイク中は気になりますし、後々消すことは不可能ですから十分注意して下さい。

オーバーダビング

リズム録りが完成したら、二本目のGt. やKey. の録音にはいりますが、このあたりで仮歌を入れる場合もあります。曲にもよりますが、自分の演奏のしやすい順番で録音したほうがよいと思います。

6-1 Gt. 録り (オーバーダブ)

リズム録りと大きくは変わりませんが、他の楽器を意識する必要はないのでマイクのセッティング等に自由がきき、オフのマイクを立てて組み合わせる音を作ることも可能です。

(注.) アコースティックGt. 等は、完全に生楽器ですのでマイクのセッティングや出音には特に注意が必要です。

6-2 Key. 録り (オーバーダブ)

Syn等の場合はあらかじめ音色を決めておいて下さい。その際に注意が必要なのはステレオにするかどうかです。トラック数の問題もありますが、音色によっては内蔵エフェクターがステレオ化してある場合があるので、よく確認しておいて下さい。録ってしまったあとで、エフェクターの数値の変更は出来ませんのでミックスダウン時にかけられるエフェクターはなるべく使わないようにしましょう。

(特にリバーブ等の空間系のエフェクターは最初から音源側でかかっていると二重でエフェクターをかけることとなり、どんどんぼやけたものになってしまいます。)
また、電子楽器のチューニングは、他の楽器とあっているか一度チェックしておくのが良いでしょう。Epf. 等は特にチューニングが気になりますし、440KHzにあわせてあるとは限りません。寧ろ、他の楽器をEpf. にあわせてチューニングした方が無難でしょう。

(注.) Key. をシーケンサーを使って同期させて録る場合には、あらかじめマニュアルで同期させる設定を確認しておきましょう。そうしないとうまく同期せず、無駄な時間がかかる場合があります。

6-3 その他

管楽器等でソロを録ると、普段聞いている以上にピッチ等のアラが目立ちますので、その点に十分注意して練習してからレコーディングに臨んで下さい。